

ホームレスの国際比較のための方法序説——フィリピン、日本、アメリカを事例に

世界の国々にホームレスが現れている。しかしその比較研究は、緒に着いたばかりである。本稿は、ホームレスの国際比較の方法について考察する。ホームレスは、グローバリゼーションの産物である。これが本稿の出発点である。本稿は、まず、グローバリゼーション概念について考察する。グローバリゼーションは、国々の固有の諸条件を介して浸透する。グローバリゼーションには、一般過程と個別過程の二側面がある。次に、比較の方法について考察する。比較はつねに構造的である。複数の事象の類似性と差異性を見出し、それらの意味を説明する。そのために、事象を構成する諸項目が、事象の中で占める位置と、事象の存立における機能を特定する。そして、事象の特徴を類型に高める。三つ、フィリピン、日本、アメリカを事例に、ホームレスの国際比較の方法について考察する。まず、三国のホームレスの特徴を素描する。次に、比較の方法に準拠し、ホームレスの国際比較の手順を提示する。最後に、ホームレス概念について、三国の史的経緯と概念をめぐる議論を一望する。そして、ホームレスの類似性（「ホームレスは非定住の人々である」）と差異性、さらに概念の範囲（「だれがホームレスか」）等の問題について考察する。その上で、比較がホームレスの類型化と理論化への途を拓き、類型の比較が現代社会研究の切り口になることを指摘する。

キーワード：グローバリゼーション、ホームレス、比較の方法

1. ホームレスの国際比較

経済のグローバル化（以下グローバリゼーション）は、国境を超えた商品・資本・人間の移動を進め、また、民営化と規制緩和の新自由主義を促した。それは、階級構成を再編し、少数の「勝ち犬」と多数の「負け犬」を生んだ。世界の都市に「新しい貧困層」が生まれ、その底辺にアンダークラスが生まれ、さらにその底辺にホームレスが生まれた。欧米で 1970 年後半に、日本で 90 年代半ばに、（旧社会主義国の）東欧諸国で 90 年代後半に、発展途上国で 2000 年代初めに、ホームレスが増えた¹⁾。ホームレスは、貧困ゆえに慣習的居住を欠く非定住の人々である²⁾。これらの事実は、2 つのことを意味する。一つ、グローバリゼーションが世界を捉え、国々の経済・社会を再編した。その中からホームレスが生まれた。二つ、経済・社会の変容は、時期も中身も国により異なる。ホームレスの形態も異なる。ここで私たちは、ホームレスの国際比較という課題に出会う。国々のホームレスは、どのように比較できるか。それは、個々の特徴を見比べて済む話ではない。そこには、特徴の意味理解の問題が介在する。またそれは、グローバリゼーションの理解に直結する。グローバリゼーション研究は、つねに比較研究である。ホームレスの国際比較を論じた研究は、すでに多い。例えば（Glasser, 1994; Hutson & Liddiard, 1994; Kemeny & Lowe, 1998; 岡本 2002a&b; Speak & Graham 2006）

がある。それらはいずれも、ホームレスの国際比較における、ホームレス概念の定義上の困難を指摘する。グローバリゼーションの国際比較も多い。比較の方法をめぐる議論も多い。比較は、社会科学の方法の基本である。比較社会学があり、比較政治学があり、文化人類学がある。

このような状況認識のもと、本稿は、次のような目的を設定する（本稿の構成）。一つ、グローバリゼーションの一般／個別過程について考察する。二つ、グローバリゼーションがホームレスを生む過程、つまり、ホームレス出現の一般／個別過程について考察する。三つ、比較の意義と方法について考察する。比較は意味の比較である。比較は類型化と理論化への途を拓く。四つ、比較の方法をホームレスの国際比較に援用する。まず、比較の材料として、フィリピン、日本、アメリカのホームレス像を素描する。次に、比較の方法に準拠し、三国のホームレスの比較の手順を提示する。最後に、ホームレスの国際比較の実例として、その鍵概念をなす、三国のホームレス概念について考察する。フィリピンと日本のホームレス像の素描に用いるデータは、過去 3 年間に収集したホームレス、行政、援助団体等の聞き取り、論文・文献・新聞に依る。アメリカのホームレス像の素描に用いるデータは、論文・文献及び一部は参与観察に依る。ここに、貴重な情報をいただいたホームレス、行政、援助団体の方々に謝意を表す。

2. グローバリゼーションとホームレス

2.1. グローバリゼーション

グローバルなモノやヒトの移動は、近代以前からあった。今日のグローバリゼーションは、3 つの条件の下で進行する固有の事象である。一つ、1980 年代の東欧革命から 91 年のソ連崩壊に至る社会主義圏の解体により、資本主義の地理的境界が消滅したこと。二つ、情報技術（IT）革命が進み、資本主義の外的（物理的）制約が消滅したこと。三つ、実体的なモノ・サービスの生産と交易（ピーター・ドラッカー Peter Drucker の real economy）に制約されない信用・金融市場（同じく symbol economy）が膨張し、資本主義の内的（投機的）制約が消滅したこと。このように、グローバリゼーションとは優れて歴史的な概念である。グローバリゼーションの研究は多い。例えば（Lo & Marcotullio, 2000; Axtmam, 2002; Bubb, 2002; Pieterse, 2002; Robertson, 2003; Hill & Fujita, 2003; Alderson & Beckfield, 2004; 正村, 2009; Hung & Kuchinskas, 2011）がある。研究の論点も多様である。それらの論旨は、3 点に要約される。一つ、グローバリゼーションは、グローバルな一般過程としてあった。それは、世界に浸透し、国々の経済・社会を同質化した。資本主義の内的・外的な拡大は、グローバルな商品・資本の競争を加速した。それに対応して、国々の政府は、（公益企業や公有地の）民営化、（とくに金融の）規制緩和の新自由主義政策を取った。他方で、国々は、多国籍企業の本社を有する国々を頂点として序列化された。国々は、（再）中心化・（再）周縁化され、両極化された。二つ、グローバリゼーションは、国ごとの個別過程としてあった。それは、国々の政府が、国内経済の防衛と強化を図る領域化・民族化の過程であった。その様態は、世界経済の中の国々の位置に規定された。それだけではない。グローバリゼーションは、国々の経済・社会の歴史的・地理的条件に制約された。それにより、グローバリゼーションが浸透する時期・速度・範囲は異なった。外的衝撃が、国々の内的条件により異質化し、雑種化（hybridize）

した。それは、ローカル自体の変容過程でもあった。三つ、一般過程と個別過程は、同時進行の過程であった。それは、ローカルな諸条件と対抗的かつ相補的な関係を取った。「国家と多国籍企業の関係は、（中略）協力的であると同時に競争的、補完的であると同時に対立的でも」あった（正村，2009：118）。グローバリゼーションは、グローカリゼーション（glocalization）であった。

2.2 ホームレス

グローカリゼーションは、リージョン・国家・地域の次元で進行した。都市の経済・空間の変容は、その一場面であった。都市は、世界・リージョン・国家の経済の、及び他都市との有機的なネットワークに編入された。都市は、それらとの密接な関係の下、個々の経済・政治を担った。そして、機能都市として互いに序列化された³⁾。そこで重要な機能を担った都市が、世界都市・グローバル都市⁴⁾である（Sussen,1991; Friedmann,1995）。

ホームレスは、このような都市の産物である⁵⁾。グローバリゼーションがホームレスを生んだと言われながら、その関係の説明は、いまだ十分ではない。著者は、それをプッシュ・プル仮説により説明した（Aoki, 2012）。それは、3つのプッシュ要因と2つのプル要因から構成される。プッシュ要因1。グローバリゼーションは、階層の全般的な下降圧力を強めた。それは資本の競争を加速し、また、経済のサービス化を促した。その結果、（都市）労働＝雇用市場が変容した。一方で、雇用の非正規化が進行し、他方で、新たなインフォーマル職種が出現した⁶⁾。この中で、労働階層を下降する人々は、インフォーマル職種に参入した。次に、インフォーマル職種の下層にある人々の一部が、街頭へ押し出された。失業と同時に住居を失い、街頭に直接現れる人々もいた。プッシュ要因2。グローバリゼーションは、資本の土地投機と公有地の民営化を促した。そして都市が再開発された。その結果、一方で、地価と住宅価格が高騰した。困窮者が入居・購買可能な住居が減少した。他方で、公有地に住む人々が排除された。こうして、住居を失った人々の一部が、街頭へ押し出された。プッシュ要因3。グローバリゼーションは、小さな政府を生んだ。その結果、労働・福祉行政が後退した。公共事業が減り、就業援助が滞り、生活扶助が削減された。それは、困窮層のホームレス化を防ぐ施策の後退を意味した。また、労働・福祉行政の後退により、ホームレスを街頭から救済する施策が滞った。その結果、ホームレスは、街頭を脱出することが（より）困難になった。プル要因1。グローバリゼーションは、サービス経済の末端に雑多な仕事を生んだ。注6に掲げた職種に、街頭の仕事が加わる。廃品回収人、ヴェンダー、バーカー（バス等への客の呼び込み）、駐車場係、ベガー等である。それらは、ホームレスの収入源となった。こうして、（より）多くの人々が、街頭に引き寄せられた。プル要因2。グローバリゼーションは、経済のサービス化を促し、消費産業が膨張した。一方で、レストランやコンビニ等の店舗が増え、他方で、市民の消費生活が豊かになった。その結果、多くの食料・生活用品が、街頭に廃棄された。それらは、ホームレスの生活資源となった。ホームレスは、人や物が激しく行き交う繁華街に多い。

これらは、労働・居住環境が変容する（グローバル）都市に一般的な事象である。こうしてグローバリゼーションは、都市底辺にホームレスを生んだ。それは、階級の両極化の象徴的な事象である。同時に、ホームレスの形態・規模・出現時期は、国・都市ごとの歴史・経済・地理に規定される。ホームレス出現の一般過程（プッシュ・プル仮説）と個別過程。それは、グローバリゼーションの一般／個別過程に照応する。

3. 国際比較の方法

3.1 比較の意義

ホームレスの国際比較に、どのような意義があるか。国際比較はどのように可能か。本節は、比較の意義と方法について考察する。比較について、定量的／定性的、方法論／手順等について、研究の蓄積がある。例えば（栗原, 1991; Boudon & Cherkaoui, 1993; Ragin, 1994; Hantrais, 1995; 佐藤, 1988; 山本, 1988; 小野, 2001; Axtmam, 2002; 新, 2004; 濱嶋・竹内・石川, 2005; 尾中, 2008a, b; 見田, 2011）がある⁷⁾。ここでは、それらを参照し、ホームレスの国際比較に向けた、いくつかの留意点について考察する。

比較とは、複数の集団や社会を対象に、事象の（不）生起、その類似と差異、それらが生じた脈絡（背景や構造）を分析し、以て、類似と差異の意味を問う作業をいう。比較の意義は4つある⁸⁾。一つ、異なる集団・社会間での事象の多様性を見る。まず、事象間の類似点（同一性）を見る。それにより、事象の一般性を理解する。次に、事象間の差異を見る。それにより、事象の個別性を理解する。また、差異を介して類似性の認識を深める。二つ、事象の生起の記述ではなく、説明が可能になる。異なる集団・社会間の事象のどこがどのように類似するか。それはなぜか。こう問うことで、類似性の意味を説明することができる。そして同時に、どこがどのように異なるか、それはなぜかを問う。その時、差異性の意味の説明が求められる。三つ、事象の類似性と差異性を析出することは、事象の諸項目の関係を特定することである。それにより、事象の概念的把握が可能になる。また、重要な差異を中心に事象の類型構成が可能になる。類型により、類似性と差異性が同時に説明される。四つ、事象の概念的把握と類型構成は、事象の認識の一般化、つまり理論の形成を促す（現実から理論への帰納）。逆に、比較は、理論の妥当性と適用可能性を検証する（理論から現実への演繹）。本稿でいえば、多様なホームレスの比較により、ホームレスの概念的把握と類型構成を行い、そこからホームレス理論、つまり、ホームレスとその編成項目の体系的説明へ進む。逆に、ホームレス理論の、多様なホームレスの分析可能性（妥当性と適用可能性）を検証する。最後にホームレス研究は、ホームレスを生んだ経済・社会の説明に到達する（「グローバルゼーションとホームレス」）。換言すれば、ホームレス研究は、経済・社会認識の切り口であり、逆に、経済・社会認識の具体化である。比較は、このような理論的営為への途を拓く。

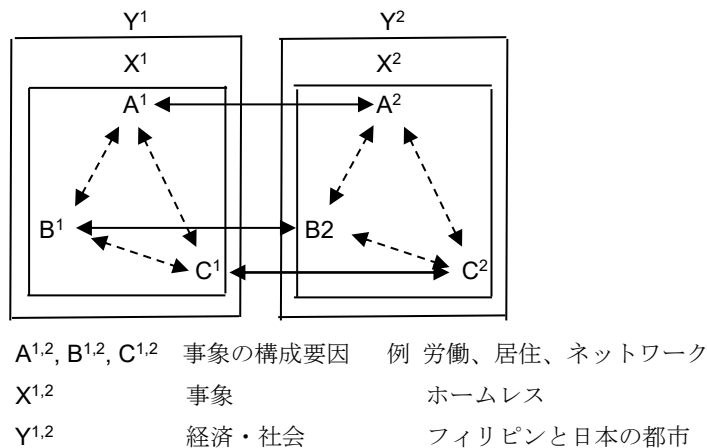
3.2 比較の方法

比較はどのように可能か。次に、事象の比較から理論の形成に至る手順について考察する。その前に、留意すべき事柄がある。複数の事象を比較するには、それらが生起する共通枠がなければならない。その中でのみ、事象の比較が可能となる。〈グローバル都市〉という枠がなければ、ホームレスの比較は叶わない。ホームレスは、通歴史的な路上生活者一般ではない。では比較には、どのような手順があるか。それは、ホームレスの国際比較を念頭に、4点に整理される。一つ、異質な集団・社会間の「同じ」事象

の比較では、まず、（異なって当然なはずの）事象間の類似性が着目される。そして、それらはどこが類似しているか、それはなぜかが問われる。ホームレスの国際比較が、その例である。フィリピンと日本のホームレスは、どこが類似しているか。それはなぜか。フィリピンと日本の経済・社会の（自明視された）異質性を前提に、ホームレスの類似点が着目される。そして、ホームレスの出現の原因が、グローバルゼーションという共通枠に求められる。次に、フィリピンと日本のホームレスの差異が着目される。それらは、どのように異なるか。それはなぜか。その原因が、フィリピンと日本の経済・社会の異質性に求められる。これに対して、複数の同質的な経済・社会間の事象の比較では、まず、類似性が自明視された事象間の差異が着目される。そして、それらはどこが異なるか、それはなぜかが問われる。ホームレスの国内比較が、その例である。東京と大阪のホームレスは、どこが異なるか。それはなぜか。この場合、東京も大阪も日本の都市であるという共通枠がある。次に、東京と大阪のホームレスの類似性が着目される。このように、最初に類似性／差異性のどちらに着目するか、それは、事象が埋め込まれた経済・社会の同質性・異質性の度合に依る。

二つ、事象間の類似性と差異性に着目するだけでは、なぜ類似／差異なのかの説明は叶わない。それに答えるには、類似点・差異点がそれぞれの事象においてもつ位置、つまり、事象の中でもつ意味を特定する必要がある。換言すれば、それらを事象の全体に脈絡化させる必要がある。事象の比較は構造的で、かつ意味と意味の比較となる。図 1 を見られたい。 A^1 と A^2 の比較（ \longleftrightarrow ）は、一方で、 $A^1/B^1/C^1$ の中の A^1 の位置を確定し、他方で、 $A^2/B^2/C^2$ の中の A^2 の位置を確定した（ \longleftrightarrow ）後に、可能となる。 X^1 と X^2 の比較は、同じ手順を介したA、B、Cの比較の総和として可能となる。そして最後に、 X^1 と X^2 の類似性・差異性の意味を、より高次の集団（ Y^1 と Y^2 ）へ脈絡化させつつ解釈する。

図 1. 構造的比較（脈絡化）



三つ、比較は、項目間の因果関係を明らかにする。図 1 で、 A^1 が変れば B^1 と C^1 が変り、 A^2 が変れば B^2 と C^2 が変るとすれば、Aは原因（独立変数）でBとCは結果（従属変数）という推定が可能になる。 A^1 と $B^1 \cdot C^1$ の変化だけでは、 A^1 と $B^1 \cdot C^1$ の相関関係が指摘できるに留まる。事象の諸

項目の位置を確定するとは、事象の生起にのつての項目間の意味の序列（基底的な項目と派生的な項目）を特定することである。ホームレスでいえば、例えば項目 A を労働、B を貧困、C を居住として、フィリピンと日本で、失職して無収入になったため、生活が逼迫し、住居も失うという事態がともに確認されるなら、労働が基底的な項目で、貧困と居住が派生的な項目ということになる。

四つ、事象の項目間の（因果）分析は、事象の類型化への途を開く。類型とは、事象の基底的な項目を中心に選択された、いくつかの項目の関係の型をいう。その関係の型の中に、事象の純化された個性を見ることが出来る。次に、類型は、事象の偏差を説明する用具となる。そして事象は、諸類型を包摂するかたちで再概念化される。最後に、ここから、事象の一般的説明を与える理論形成の途が拓かれる。

こうして比較は、社会（科）学の基本的な分析・構成方法となる。「いくぶんとも複雑性をもつ社会的な事実は、あらゆる社会種をつうじてその全体的な発達をたどることによつてのみ説明されることが出来る。とすれば、比較社会学は、社会学の一特殊分野ではなく、純然たる記述的なものであることをやめて、諸事実の説明へと方向づけられるかぎり、まさに社会学そのものなのだ」（傍点は原文）（Durkheim, 1895=1978: 258）。

4. ホームレスの国際比較

ホームレスの国際比較は、どのように可能か。次に、以上の議論に準拠し、またフィリピン、日本、アメリカのホームレスを事例に、ホームレスの国際比較について考察する。ここでの目的は、国際比較そのものではない。三国のホームレスの特徴を素描し、それを材料に、比較の方法について考察することにある。最後に、ホームレスの国際比較の鍵概念（ホームレス）について考察し、国際比較の困難を例示する。

4.1 3つのホームレス像

4.1.1. フィリピンのホームレス⁹⁾

フィリピン（の都市）では、スクオッターの問題が大きく、ストリート・ホームレス（以下ホームレス）は、その一部と見做された。ゆえに、ホームレスの存在は、社会問題として構築されなかった。ホームレスに関するデータは、行政の一部のものを除いてほとんどない。ホームレスの全体像は、間接的な資料（ストリート・チルドレンや福祉施設関係の資料）から推測するしかない。マニラ（首都圏、以下同じ）で2007年に、スクオッターに270万人（54.4万世帯）が居住し、それはマニラ人口の23.4%に相当する（UN-HABITAT, 2011:19）。これに対して、ホームレスは、マニラで「10万人をはるかに超える」（Aoki, 2008:156）程度と推計された。しかし2000年代に入って、ホームレスは急増している。この事実は、行政・NGO・研究者に認識されている。

マニラのホームレスの最多部分は、単身男性である。その他は、女性と子どもを含むファミリー・ホームレスである。ストリート・チルドレンの家族も、多くはホームレスである。ゆえにホームレスの年齢は、若年・

壮年層を中心に幼児から高齢者に及ぶ。これらの人々は、どこから来たのか。その社会的出自は、6 つに整理される。一つ、スクオッター居住者。マニラで都市再開発、交通渋滞の緩和、美化政策が行われ、繁華街や道路等のスクオッターが撤去される。そして、再居住の補償も自前の移転先もない人々の一部が、ホームレスになっている。マニラのホームレスの最大の給源は、スクオッターの居住者である。二つ、再居住地からの U ターン者。スクオッターを撤去され、マニラの隣接州の再居住地へ移っても、(多くの場合)そこには仕事がない。生活施設(学校や市場等)もない。こうして再居住者の一部がマニラへ戻る。しかしマニラにはもう家がない。そのような人々の一部が、ホームレスになる。三つ、農漁村からの移住者と出稼ぎ者。今も多くの人がマニラへ移住している(数は減っている)。出稼ぎの人もある。移住者の多くは、親族の家(多くはスクオッターにある)に寄留する。しかし行く宛のない人々は、ホームレスになる。出稼ぎ者にも、街頭で起居しながら働く人がいる。四つ、失職者。マニラで雇用の削減や非正規化が進み、失職者が増え、階層下降の圧力が強まった。多くの人が都市雑業層(インフォーマル部門)へ流入する。そして、雑業層の一部がホームレスになる(前掲参照)。五つ、ストリート・チルドレン¹⁰⁾。彼彼女ら(の一部)は、学校へ行けず、そのため街頭生活を脱出する術がない。彼彼女らに家族がいても、家族もスクオッター住いかホームレスである。彼彼女らの多くは、成長してホームレスになる。六つ、施設入所者。マニラにホームレスの収容施設ホセ・ファベラ・センター Fose Fabella Center がある。しかしそれは、250 人前後を収容する一時保護施設である。また、ストリート・チルドレンや困窮した女性や老人、障害者の保護施設がある。しかし、それらの収容者が施設を出ても、街頭生活を脱出するのは容易でない。元収容者(の一部)は、施設と街頭を往復するリピーターになる。

ホームレスは、ヴェンダー、廃品回収人、ベガー等の雑多な仕事により生活を凌ぐ。マニラに、日雇人夫の雇用労働はほとんどない¹¹⁾。ホームレスはたいてい、飢餓状態にあり、栄養障害で、健康を害している。しかしマニラで、餓死するホームレスの話は聞かない。街頭にはホームレスだけでなく、他所(多くはスクオッター)に住居をもつヴェンダーや廃品回収人、ベガーがいる。これらの人々とホームレスの区別は容易でない。

マニラに、多くのスクオッター居住者がいる。彼彼女らはたいてい、河川敷・鉄道敷・ゴミ捨て場・公園等の公共空間に居住する。彼彼女らは、住む土地に対する居住権を持たない。ゆえに、彼彼女らもホームレスである(スクオッター・ホームレス)。しかし彼彼女らは、居住する土地を実質占有する定住者である¹²⁾。公共空間の占有は、社会的に承認されている。1992 年に制定された都市開発住宅法(Urban Development and Housing Act)では、公有地にあるスクオッターの、代替地の補償がない撤去を禁じている(法の実効性はあまりない)。同じことは、街頭の一部を占有するヴェンダーについてもいえる。ヴェンダーが街頭を排除される時、彼彼女らは代わりの場所を要求する。これが、街頭で暮らすホームレスを取り巻く環境である。公共空間の占有という点で、スクオッター、ヴェンダー、ホームレスは同一線上にある。公共空間の占有に対する社会的な寛容。ホームレスはその臨界点にある。排除において、ホームレスは最初の標的となる。

近年、マニラで、スクオッター、ヴェンダー、ホームレスの公共空間からの排除が強まった。都市再開発、渋滞の緩和、街路の美化、危険地区の改良等が進んだ。他方で、公有地の民営化が進み、払い下げ土地の資本活用が高まった。こうして、公共空間の私的所有と、それを占有する人々の排除が進んだ。しかし人々は、公共空間の実質的な占有を既得権益と見てきた。排除はその既得権益の侵害で

ある。ゆえに人々は排除に抵抗する。スクオッターで、行政・企業・警察と居住者の衝突が頻発する。街頭で、行政・警察がヴェンダーを排除し、彼らが去るとまた戻る「いたちごっこ」が繰り返される。時には両者が衝突し、流血の事態となる。抵抗する術がないホームレスは、この排除と抵抗の中を右往左往する。そして、行政・警察の目が届かない街頭の隙間空間に避難する。これが、マニラのホームレスの政治環境である。

4.1.2 日本のホームレス

日本に多くの街頭生活者が現れたのは、1960-70年代の経済高揚期であった。公共事業が増え、建設業が隆盛した。単身男性の日雇労働市場が膨張し、そこへ農業や炭鉱、集団就職の若者が流入した。そして、釜ヶ崎や山谷等の寄せ場が膨張した。若者たちは飯場を転々とし、契約が終ると寄せ場に戻った。仕事がない時は、寄せ場周辺の街頭で野宿して、次の仕事を待った。そして、飯場と寄せ場（のドヤ）と街頭を往還した。彼らは、現役のアプレ労働者であった。1990年代に経済が停滞した。建設業が縮小し、寄せ場が縮小した。日雇労働者は仕事がなく、街頭に流れ出た。製造業・サービス業も停滞し、労働者が排出され、その一部が合流した。こうして野宿者が現れた。その中心は、ふたたび資本に雇用されることのない、高齢の労働者であった。単身男性の野宿者が、寄せ場周辺から市内に拡散した。こうして、日本に「ホームレス（野宿者）問題」が現れた。2000年代も経済停滞が続き、昂進した。企業が雇用調整をし、雇用の非正規化と雇止めが進んだ¹³⁾。企業を解雇された人の多くは、同時に住居を失った人である¹⁴⁾。その一部が、一時居住施設（ネットカフェや喫茶店、サウナ）を利用する。その多くが街頭にも寝泊りする。こうして、日本に（欧米と同義の）ホームレスが現れた。彼彼女らは、一時居住施設や街頭から仕事に出ていく。その中心は、日雇直用の若年層と日雇派遣の中年層である。これらのワーキングプアや生活保護層が、下降圧力に曝されている。そして、その一部が（常態的）ホームレスになっている。こうして日本のホームレスは、三層の人々（仕事と住居を喪失した若年と中年の現役労働者と高齢野宿者）から成る。若者と中年層には、寝場所を点々とするホームレスが多く、高齢者には、公園や河川敷等に定着するホームレスが多い。

街頭・公園・河川敷で起居するホームレスの実態は、具体的にどうだろうか。まず、ホームレスの数が減っている。それは全国で、2008年 16,018人、10年に 13,124人、12年 9,576人であった（厚生労働省 2012）。2012年に、東京都 2,134人、大阪市 2,179人、横浜市 609人等であった。厚生労働省が2012年に街頭で生活する 1,300人に対して行った面接調査によれば、ホームレスの実態は、次のようになる（厚生労働省、2012）。1) ほとんど男性である（95.5%）。2) 高齢である（平均年齢 59.3歳）。他方、平均年齢以下の人が 26.4%いる。3) 低学歴である（小・中学校 51.5%、高校 38.2%）。4) 未婚者が多い（60.0%）。離婚・死別も多い（33.5%）。5) 親きょうだいがいる人が多い（74.8%）。しかし連絡を取っている人は少ない（22.1%）。6) 野宿場所での定着者が多い（83.2%）。場所は公園、道路、河川敷が多い。7) 野宿期間の長い人が多い（3年以上 62.0%）。8) 仕事をしている人は 60.4%である。仕事は、廃品回収 77.7%、建設・運輸日雇 11.7%、雑業（看板持ち・チケットならび・雑誌の販売等） 3.1%等である。ホームレスになる前の状態は、次の通りである。9) ホームレスになる前にもっとも長く就いていた仕事からホームレスになる直前の仕事で、建設従事者が増える（40.2%→46.2%）。10)

従業上の地位では、正規雇用者が減り（57.6%→42.0%）、日雇等の非正規雇用者が増える。11) 今回野宿に至った理由は、「仕事がない」と答えた人が多い（61.1%）。

以上の実態から、日本のホームレスの特徴が浮び出る。一つ、ホームレスの数が減っている。しかし、ホームレスが実際に減ったわけではない。ホームレスは不可視化した。まず、生活保護によるホームレスのアパート・ドヤへの入居が進んだ。それは持続的居住であるが、その実態は不安定である。次に、ホームレスが公園から排除され、小路や物陰へ移動した。さらに都心から周辺へ、大都市から中小都市へ拡散した。これらの事情により、ホームレスの暗数が増えた。二つ、ホームになる前の仕事で、建設仕事の比重が大きい。三つ、ほとんど男性である。四つ、ほとんど単身者である。親きょうだいがいても、連絡を取らない。五つ、高齢者が多い。六つ、野宿期間の長い人、及び公園等での定着層が多い。七つ、仕事は廃品回収が多い。

この他にも、日本のホームレスの特徴がある。一つ、外国人ホームレスが（ほとんど）いない（エスニシティが単一である）。二つ、ホームレスを対象とする貧困ビジネスが横行している¹⁵⁾。三つ、市民のホームレスに対する偏見が強い。ホームレスに対する暴力事件が後を絶たない。四つ、日本でも、公園に住むホームレスと彼彼女らを排除する行政・警察の間で、公共空間の占有の正当性をめぐる衝突がある。しかし行政・警察の力は圧倒的に強い。そこには、ホームレスの排除を擁護する世間の目がある。ホームレスは、都市の隙間空間に隔離されている。

4.1.3. アメリカのホームレス

アメリカのホームレス物語は、19世紀後半に始まる。その頃、西部・中西部の土地開発や鉱物掘削、鉄道敷設に多くの労働者が動員された。彼らはホーボー（hobo）と呼ばれ、鉄道で移動し、仕事が終ると、都市の安ホテル街（stem）で次の仕事を待った。安ホテル街の最大の街が、シカゴのホーボヘミア（hobohemia）である。その居住者は、4つに分類される（Anderson, 1922: 91-99）（平川, 2009: 33）。いずれも、中心は若年・壮年の白人である。1) ホーボー（移動しながら、臨時的な仕事をする人々。渡り労働者）、2) トランプ（tramp）（移動しても、仕事をしない人々）、3) ホーム・ガード（home guard ホーボヘミアに定着し、雑多な仕事をする人々）、4) バム（bum ホーボヘミアに定着し、仕事をしない人々。その中心は、安ホテルにも泊れない街頭生活者）。ネルス・アンダーソン（Nels Anderson）は、その著作でこの人々を描いた（Anderson, 1922, 1998）。この時期のホームレスの中心は、ホーボーであった。しかし1929年の大恐慌の頃には、ホーボーやトランプが加齢化し、また仕事がなく、街頭に起居する人（バム）が増えた。ホーボヘミアは、スキッド・ロー（skid row 底辺に滑り落ちるの意）に変わった。そこに、酒や薬物に依存する男たちがたむろした。ホーボヘミアは、働く労働者の街から無為に過ごす人々の街に変わった。この状態が1970年代まで続く。これが、アメリカのオールド・ホームレスである。

1970年代後半の経済危機により、失業と貧困に喘ぐ人々が増えた。住宅価格が高騰した。政府の雇用対策や福祉施策が縮小した。その結果、多様な人々が社会の底辺に落層した。1980年代に入り、その中から仕事も住居もなく、街頭に起居する人々が現れた（菰淵, 1994: 244）。白人男性の他、黒人男性、女性（シングル・マザー）と子どもが増えた。ホームレスが街頭とシェルターを往復する。そのような光景が、全国の都市に広がった。しかもその多くは、アルコールや薬物の依存、精神疾

患の深刻な状態にあった。加齢した白人男性のホームレスから、若く人種的に多様で、女性・子どもを含むホームレスへ。これが、アメリカのニュー・ホームレスである。

人々は、労働市場が沈滞し、入居可能な（affordable）住居がなく、解雇や失業、家賃滞納や立退きに会い（構造的背景）、家族崩壊や遺棄、家出、虐待、さらにアルコール・薬物依存、精神・身体疾患等の事情（個人的背景）を抱えて、ホームレスになる（Jahiel, 1992: 52）¹⁶⁾。住宅・都市開発省の全国調査によれば、アメリカのホームレス像は、次のようになる（DHUD, 2010）¹⁷⁾。2010年1月の調査日に、全国で649,917人のホームレスが確認された（07年から3.3%の減少）（DHUD, 2010: 8）。その数は、カリフォルニア、ニュー・ヨーク、フロリダの3州で、全体の39.8%を占めた（DHUD, 2010: 22）。その内、シェルターにいたホームレスは62.1%で、街頭等にいたホームレスは37.9%であった（DHUD, 2010: 3）。単身者は62.8%、家族連れは37.2%であった（79,446家族）（DHUD, 2010: 6）。一時宿泊のホームレスは83.1%、長期宿泊のホームレスは16.9%であった（DHUD, 2010: ii）。この他に、2009年10月-10年9月に、一晩でも緊急シェルター、移行（transitional）シェルターを利用したことのある人が、1,593,150人いた（DHUD, 2010: 8）。その内訳は、単身者64.8%、家族連れ35.2%であった（DHUD, 2010: 10）。成人の性別は、男性62.3%、女性37.7%であった（DHUD, 2010: 16 以下同頁）。年齢構成は、18歳未満21.8%、18-30歳23.5%、31-50歳37.0%、51-60歳14.9%、61歳以上2.8%であった。身体・精神に疾患をもつホームレスは、36.8%であった¹⁸⁾。人種は、白人51.3%、アフリカ系37.0%、アジア系・先住民他11.7%であった。シェルターにいた家族連れのホームレスの性別構成は、男性22.1%、女性77.9%であった（DHUD, 2010: 20 以下同頁）。人種は、白人43.0%、黒人42.0%であった。年齢構成は、18歳未満59.3%、18-30歳23.2%、31-50歳16.2%であった。最後に、最初にシェルターに入る前の居住は、街頭39.1%、持家・借家（家族・友人と同居を含む）42.0%、医療・更生施設11.0%、ホテル・モーテル等7.9%であった（DHUD, 2010: 23）。

アメリカのホームレス像は、次のように整理される。一つ、多くのホームレスがシェルターを利用している。政府行政のホームレスの住居対策は、緊急シェルター、（一般居住への）移行シェルター及び一般住居の提供から成る¹⁹⁾。二つ、シェルターに一時宿泊するホームレスが多い。また、最初にシェルターに入る前に一般住宅に住んでいた人が多い。つまり、多くの人が簡単にホームレスになっている。三つ、もっともホームレスになりやすいのは、成人男性、単身者、壮年層、アフリカ系アメリカ人、身体・精神疾患患者である。その上で、不況の中、単身男性のホームレスが増えている（DHUD, 2010: 34）。また、福祉予算の削減の影響で、30歳以下の若者ホームレス（とくに女性）が増えている（DHUD, 2010: 34）。四つ、アルコール・薬物依存に伴う精神疾患が深刻である。この個人的要因の背景にも貧困がある。五つ、家族連れでシェルターに宿泊する人に、マイノリティ出身のシングル・マザーが多い。子ども（18歳未満）のホームレスが多いが、そのほとんどは母子世帯に属する。

4.2. ホームレスの比較

4.2.1 比較の手順

フィリピン、日本、アメリカのホームレスの特徴を要約すると、表 1 のようになる（一つの整理でしかない）。特徴のすべて、グローバリゼーションの産物である。どの国のホームレスにも、労働・居住の問題や社会の視線、政府行政の政策が深く関わっている。しかしそれらの問題の表出は、国ごとに異なる。表はそのことを示している。グローバリゼーションがホームレスを生む事情・過程・結果は、国ごとに異なる。それは、ホームレスの社会的認知、つまり、ホームレス問題の差異でもある。図 2 を見られたい。それは、国ごとの、ホームレス形成の中心的な過程を示したものである。

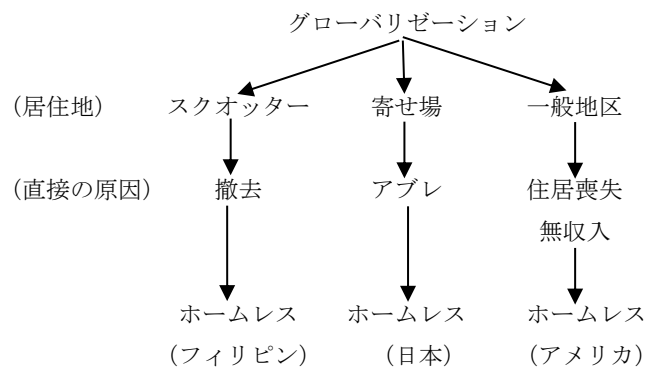
フィリピン、日本、アメリカのホームレスは、どのように比較されるか。ここで議論は、前掲のグローバリゼーション論と比較の方法論に還ることになる。表 1 の項目の横（行ごと）の対照（例えば 1.人口の「かなり多い」「少ない」「多い」）は、国ごとのホームレスの差異を見比べたものにすぎない。そこから、差異の意味を知ることはできない。ホームレスの国際比較には、4 つの手順が必要となる。一つ、国ごとのホームレスの全体を描くこと。そして、その中での項目の位置と役割を特定すること。表 1 でいえば、項目を、縦（国ごと）の流れ、つまり A1～A13、B1～B13、C1～C13 ごとに分析し、総合して、ホームレス A、B 及び C を構成する。前節のフィリピン、日本、アメリカのホームレス像の素描は、その作業の一環ともいえる。二つ、ここから、国ごとのホームレス類型が構成される。類型は、国ごとのホームレスのもっとも重要な特徴を中心に構成される。ここでは（強引に）、ホームレス A を「貧困型」とする。フィリピンでは、貧困が直接かつもっとも深刻に作用して、人々はホームレスになる。ホームレス B を「労働型」とする。日本では、アブレ（「仕事がない」）が直接かつもっとも深刻に作用して、人々はホームレスになる。ホームレス C を「福祉型」とする。アメリカでは、シェルター利用の可否が直接かつもっとも深刻に作用して、人々はホームレスになる。いずれのホームレスの背後にも、労働、貧困、居住の問題がある。三つ、ホームレス A、B 及び C を、それぞれの国の経済・社会 X、Y 及び Z に脈絡づけること（X [A]、Y [B]、Z [C]）。こうして、ホームレス形成の背景が特定され、ホームレスの形成過程の分析が可能になる。四つ、これらの手順を経て、ホームレス A、B 及び C の比較が可能になる。項目の比較は、国ごとのホームレス像に媒介され、さらに経済・社会に脈絡化された意味の比較になる。例えば 1.人口の「多い」「少ない」の意味は、こうして特定される。そして、差異の意味が説明される。その時、ホームレス類型が比較の便利な用具になる。類型は、ホームレスの項目を分析し、それを経済・社会へ脈絡化する準拠枠となる。

こうして、ホームレスの比較が成立する。比較により、国々のホームレスの類似性と差異性が説明される。まず類似性に着目することで、グローバリゼーションがホームレスを生じる共通の過程を捉え、以て、グローバリゼーションの理解を深める。次に、差異性に着目することで、ホームレスの個別の姿を鮮明に描き、以て、その個別性を生じる経済・社会の特質を浮き彫りにする。換言すれば、ホームレスを切り口に経済・社会を分析する。こうしてホームレス研究は、社会（科）学の一主題となる。

表 1. ホームレスの主な指標リスト

指標	フィリピン	日本	アメリカ
1. 人口	かなり多い	少ない	多い
2. 性別	男性>女性	男性	男性>女性
3. 平均年齢	若・中年	高年	若・中年
4. 人種傾向	単一	単一	白人・黒人
5. 単身/家族	単身・家族	単身	単身・家族
6. 最多部分	単身男性	単身男性	単身男性
7. 子ども	単身・家族	いない	家族
8. 主な問題	貧困	労働	居住
9. 主な生計	自営	自営・雇用	福祉
10. 居住	街頭	街頭・施設	施設・街頭
11. 家族関係	強い	切断	弱い
12. 社会の視線	弱い蔑視	強い蔑視	弱い蔑視
13. 可視性	不可視的	可視的	可視的
総合	ホームレス A	ホームレス B	ホームレス C
類型	貧困型	労働型	福祉型
全体社会	経済・社会 X	経済・社会 Y	経済・社会 Z

図 2. ホームレス形成の代表的な過程



4.2.2. 概念の問題

フィリピン・日本・アメリカのホームレスは、いずれもグローバリゼーションの産物である。彼彼女らは、貧困ゆえに慣習的居住をもたない非定住の人々である。貧困（無収入）の背後には労働（失職、アブレ）の問題がある。ホームレスは、社会の蔑視の中、街頭で追われながら生存の糧を求める。このような類似の物語は、延々と続く。他方で、労働（例えば都市雑業）、貧困（例えば生活水準）、居住（例えばシェルター）の実際は、国ごとに異なる。フィリピンとアメリカのホームレスは、街頭での物乞いを収入源の一つとする。日本のホームレスは物乞いをしない。また、物乞いの価値観や方法は、フィリピンとアメリカでは異なる²⁰⁾。フィリピンのホームレスはいつも飢えている。日本のホームレスはときどき飢える。ア

アメリカのホームレスで飢える人は少ない。フィリピンのホームレスは、公園での居住を「当然必要なこと」と思っている。日本のホームレスは、「恥ずかしいこと」と思っている。アメリカのホームレスは、「市民の権利」と思っている。このような差異の物語は、延々と続く。表 1 に見る項目の国ごとの差異は、どれも重要な意味を持つ。要するに話はこうなる。ホームレスの鍵概念となる用語はどれも、国ごとの歴史に規定され、経済・社会の中での意味をもつ。そこで、ホームレスの国際比較の要をなす概念〈ホームレス〉について考察する。

ホームレス概念の構成は、まず、ホームレスの生活実態に基づいて行われる。ホームレスは、どんな人々で、どんな生活をしているか。これを〈ホームレスの問題〉と呼ぼう。次に、ホームレスの社会的認知に基づいて行われる。その社会で、ホームレスの何が問題とされているか。これを〈ホームレス問題〉と呼ぼう。ホームレスの問題（生活実態）は、まず、経済・社会の諸条件に規定される。次に、ホームレス問題（社会的認知）に規定される。逆にホームレス問題は、ホームレスの問題に規定される。しかし両者は、同じものではない。フィリピンで、ホームレスの問題は厳存するが、ホームレス問題は小さい。日本で、ホームレスの問題は低減しているが、ホームレス問題は（依然として）大きい。アメリカで、ホームレスの問題もホームレス問題も大きい。最後に、ホームレスの問題もホームレス問題も、国々に固有の史的経緯をもつ。これを〈ホームレス史〉と呼ぼう。ホームレスの問題もホームレス問題も、ホームレスの史的展開の刻印を留めている。ゆえにそれは、ホームレス概念の構成の重要な一契機となる。ホームレスは、これら 3 つの契機を総合した概念である。契機の中身と総合の過程は、国ごとに異なる。以下、この点に留意し、かつ比較の観点に立ち、フィリピン、日本、アメリカのホームレス概念をめぐる事情について一望する。

フィリピンで、ホームレス概念に関する議論は少ない。これまで、フィリピンの最大の都市問題は、スクオッターの問題であった。スクオッターの居住者は、公共空間に、土地の所有者に無断で住む人々である。ゆえに、彼彼女らもホームレスである。他方で、近年、街頭、商店の軒下、橋の下、海岸突堤、教会広場、廃屋、廃車等で暮すホームレスが増えた。国家住宅庁（National Housing Authority）は、街頭生活者を（street dweller）と呼んだ（NHA, 1993）。アーノルド・パディラ（Arnold Padilla）は、スクオッターに住む人々スクオッター・ホームレスと呼び、街頭の人々を可視的ホームレス（visible homeless）、永久的ホームレス（permanent homeless）等と呼んだ（Padilla 2000:5-6）。エミリー・ロック（Emily. Roque）、およびアダ・コリコ（Ada Colico）等は、街頭生活者を、欧米の概念を援用してホームレスと呼んだ（Roque, 2011; Colico et.al, 2011）。このように、街頭生活者を呼ぶ呼称はいくつかあるが、いずれも街頭で起居する人々（rough sleepers または roofless people）を指している。フィリピンの都市に、シェルターや保護施設に入るホームレスはいる。しかしその数は少なく、ホームレスといえば、街頭生活者のことを指す。その点で、フィリピンのホームレスは、欧米のそれに準拠しながら、実質の概念の範囲は異なる。筆者は、街頭生活者を、スクオッター・ホームレスと区別し、かつ街頭で暮す人々を指すものとして、ストリート・ホームレスと呼んだ（Aoki, 2008）。いずれにせよフィリピンでは、街頭生活者の生活実態が未分化で、その社会的認知も未成熟なため、ホームレス概念をめぐる議論は、これからである。フィリピンで、ホームレス概念の構成において留意すべき点は、2 つある。一つ、ホームレスをスクオッター居住者と異なる存在として概念化すること。前者は、近年ようやく後者から分離しつつある。二つ、フィリピンのホームレスを、アメリカや日本のホームレスと異なる存在として概念化すること。そのような問題意識はいまだ皆無である²¹⁾。

日本で、街頭生活者は、「浮浪者」「住所不定者」「ホームレス」「路上生活者」「野宿生活者」「野宿労働者」「野宿者」等と呼ばれてきた (Aoki, 2000: 108-113)。「浮浪者」は差別的呼称で今は用いられず、「住所不定者」は伝統的な行政用語であり、「ホームレス」はマスコミ用語であり、「路上生活者」は関東を中心に、「野宿生活者」は関西を中心に行政・支援者により用いられ、「野宿労働者」は、運動団体により用いられた。街頭生活者をどう呼ぶかは、彼彼女らに対する関心、つまり、彼彼女らが抱える問題のどれを本質的な問題と見做すかに依る。このような概念構成の困難を避け、野宿（街頭生活）という事実に着目し、さまざまな問題を包括する概念として、「野宿者」が用いられた。ところが、2002年に「ホームレスの自立の支援等に関する特別措置法」が制定され、行政のホームレス対策が、公園等の野宿者を排除し、彼彼女らを自立支援センターや一時宿泊所に入れる方針に移った。その結果、野宿者とセンターや宿泊所に入った人々が、一括されて〈ホームレス〉と呼ばれるに至った。その後、施策の中心は、生活保護を適用して街頭生活者をアパートに入れる方針に移った。その人々は、元ホームレスと呼ばれた。さらにその後、2008年のリーマン・ショック (Lehman Shock) を頂点に、派遣雇用や直用の非正規労働者の解雇・削減が増え、失職と同時に住居を失った人々の一部が街頭に流れ出た。若年層は、インターネットカフェや深夜喫茶等の一時宿泊施設や乗用車等で寝て、そこから仕事に出て行く。金がなくなると街頭に寝る。中年層は、雇い止めに会い、寮や社宅を追い出され、街頭で寝ながらハローワークに通う。こうしてホームレスに、建設土工出身で仕事復帰が困難な高齢野宿者に、若者や中年の現役労働者が加わった。後者の人々（の中心）は、一時的な野宿者であり、ホテルや一時宿泊施設と街頭を往復する。日本で、これらの全体が、ホームレスと呼ばれるに至った (青木, 2011: 29-30)。

アメリカで、ホームレスは、白人男性で現役労働者のホーボーを中心とする段階（ホボヘーミアの時期）、白人男性でアルコール・薬物依存のバムを中心とする段階（スキッド・ロウの時期）、アフリカ系や若い女性（シングル・マザー）、子どもを含むニュー・ホームレスが現れた段階（ホームレスが市内に現れた時期）を辿った。アメリカのホームレス概念には、このような歴史が刻まれている。今日、ホームレス施策を行う政府は、ホームレスを「住居目的以外の場所、ホームレスを対象とする緊急者ルターや一時的な住居、あるいはホームレスを支援するプログラムから支給された無料・割引券を利用する緊急宿泊施設といった場所に寝泊りする人々」 (Levinson, 2004=07, 239) と捉える。この理解によれば、街頭で起居する人、及び住居目的以外の場所やシェルター、緊急宿泊施設に寝泊りする人のすべてが、ホームレスである。前掲の住宅・都市開発省の定義でも、街頭生活者に、緊急シェルター、移行シェルターにいる人、親戚や友人の家に同居する人のすべてが、ホームレスである。1日時点のカウントで、ホームレスの62.1%がシェルターにいたという実態からして (DHUD, 2010:3)、このような理解は首肯できる。つまり、非定住者すべてをホームレスとする。これが、アメリカのホームレス概念のもう一つの特徴である。ただし実際は、アメリカに、このような包括的な定義から、街頭で起居する人々に限定する定義まで、多くのホームレスの定義がある²²⁾。定義次第で、ホームレスの数は増減する。ゆえにホームレス政策も変わる。ホームレスの分類規準をめぐる議論も多い。ホームレスは、多様な形態・ニーズ・政策課題をもつ人々であり、研究者・行政・NGOが多様な関心をもつ人々である²³⁾。ゆえにホームレスの定義は、ホームレス状態 (homelessness) の特定の側面・関心に即して、個別に定義するほかない。つまり、ホームレスの定義は無限に多様である。そこにはつねに操作的定義しかない。これがアメリカ

の議論の結論と思われる。

5. 国際比較の行方

フィリピンで、ホームレスの定義をめぐる議論はまだない。日本で、ホームレスの定義をめぐる議論は少ない。一時的宿泊施設にいる人々は、ホームレスである。生活保護を受給して持続的宿泊施設（アパートやドヤ）にいる人々は、元ホームレスである。しかし日本で、一時的宿泊施設にいる人々に対する関心は、いまだ小さい。アパートやドヤから街頭に戻る人々に対する関心も、小さい。アメリカで、ホームレスの定義をめぐる議論は多い。それらは、非定住の人々のすべてをホームレスと見做している。このような理解には、2つの背景がある。一つ、政府が、ホームレスをシェルターに入れる施策に重点を置いている。ゆえに、シェルターにいるホームレスの存在が、ホームレス問題の中心とされている。逆に、街頭にいるホームレスの把握は、いまだ十分でない。二つ、社会の底辺にあるだれもが簡単にホームレスになる危険にある²⁴⁾。アメリカでホームレス体験をもつ人が、累積して数百万人と推定される。換言すれば、定住と非定住の壁が低く、流動的である。

ホームレスが非定住の人々であるとして、非定住の中身をどう捉えるかにより、「だれがホームレスか」が決まる。ゆえに、たんなるホームレスの数の見比べには、あまり意味がない。ホームレスの語によるホームレスの直接の見比べも、意味がない。ホームレスの定義の差異、その原因・脈絡・意味の特定こそ、国際比較の戦略的なポイントとなる。ホームレスの国際比較をめぐる研究はある。しかし、ホームレス概念の定義をはじめ、種々の問題がその比較を阻んでいる。国際比較の実際は、これからである。本稿で議論した方法論が、国際比較にどれほど援用可能か。ホームレスの定義をどうするか。比較の基準をどうするか。その他、技術的問題が山積している。方法論から具体的な手順へ。本稿が、その一つのステップになれば幸いである。

[注]

- 1) トヴァ・ヘジェストランド (Tova Höjdestrand) は、1990年代に、ロシアのセント・ペテルスブルグ (St. Petersburg) 市のモスクワ (Moscow) 駅で、200人のホームレスについて質的調査を行った (Höjdestrand, 2009)。この時期のロシアのホームレスは、ソ連時代の遺制と資本主義の影響を二重に蒙った人々であった。その中心部分は、元受刑者、住民登録証 (*propiska*) を持たない人、公営住宅等の住居を失った人から成った。とくに住民登録証を持たない人は、仕事と住居に応募する資格を失った。この人々がロシアに300万人、ペテルスブルグに52万人と推計された (Höjdestrand, 2009: 6)。この人々や他の事情で住居を失った人々の一部が、ホームレスになった。これらの背景には、旧体制の遺制が自由な資本主義化を妨げ、多くの人が労働市場に参入できないという、ロシアの制度と経済の矛盾があった。
- 2) 岩田正美は、ホームレスを「慣習的居住が常時確保されていない状態」にある人々とした。そして、その根底にある貧困問題を重視し、ホームレスを「不定住的貧困」にある人々となし、〈定住〉概念

の検討を行った（岩田,1995：15-22）。

- 3) チャイルド・ヒル（Child Hill）は、機能的に相互に入り組んだ都市を「入れ子（状態にある）都市」（nested city）と呼んだ（Hill, 2003: 213）。そして、どの都市もなんらかの経済機能を担っているものであり、都市が丸ごと序列化されることはないとした。
- 4) 世界都市は、世界経済において大きな機能を担う都市をいう。それ自体は、グローバリゼーションの前からあった。これに対して、グローバル都市は、世界経済のネットワークの有機的で不可分な一部（結節）をなす都市をいう（Baum, 1998:2）。一般に、両者は互換的に使われている。
- 5) 世界には、農村のホームレスも多い。しかしその原因や形態は、都市のホームレスと異なる。本稿は、農村のホームレスを考察外とする。
- 6) 〈インフォーマル〉概念についての議論は多い。例えば（池野・武内,1998）がある。ここでは、その中身に立ち入らない。サスキア・サッセン（Saskia Sassen）は、ニューヨーク州のサービス業の下位職種として、次のものを掲げた（Sassen,1988=92:234）。メイド、清掃人、ビル等の管理人、荷物運搬人、銀行内使い走り、炊事場手伝い、食料貯蔵室係、サンドイッチ／コーヒー係、食事サービス、客室係、切符もぎ取り、在庫管理事務員、手の洗濯人、機械の洗濯人、手洗いのドライクリーニング従業者、しみ抜き作業要員、プレス作業要員、洗濯物をたたむ係、敷物洗濯人、靴修理人、配達労働者、駐車場管理人、害虫・鼠等の駆除業者、包装作業労働者等。これらは、産業国・途上国に普遍的に見られる都市雑業（urban miscellaneous job）である。青木は、これらを〈新労務〉（new labor）と呼んだ（Aoki, 2000: 6）。
- 7) 比較の方法をめぐる議論は、社会学より政治学、文化人類学で先行している。そこには、比較の意義・方法・主体をめぐる詳細な議論がある。ここでは、その議論に立ち入らない。
- 8) 比較は、異なる集団・社会間での事象の生起の可否を知ることから始まる。グローバリゼーションが浸透しながら、ホームレスが現れた都市と現れなかった都市がある。それらの事情を問うことで、都市や社会の特徴を知ることができる。本稿は、ホームレスが現れなかった都市については、考察外とする。
- 9) マニラのホームレス像の素描は、おもに次のものによる。（Aoki, 2008）（Roque, 2011）（Aoki, 2012）
- 10) キャサリン・セッリ（Catherine Scerri）は、2001年に、マニラで11,346人のストリート・チルドレンを数えた（Scerri, 2009: 21）。資料ごとに数が大きく異なるので、正確な数は特定できない。
- 11) フィリピンで、建設土木等の日雇労働者は、ほとんど親族縁者のコネで就業する（建設労働者で組合活動家5人の話。組合事務所で。1999年9月30日）。
- 12) 定住と非定住はボーダーレスである。公共空間の占有にも、いくつかの段階がある。それは、スクオッターとホームレスの定義に関わる（青木, 2012）。
- 13) 非正規雇用、雇い止めの実態の一端は、次の通りである。2010年に、全国に269,790人の雇い止め労働者がいた（厚生労働省,2010: 218）。その内訳は、派遣労働者55.1%、契約・期間雇用者23.3%であった。また、2007年の東京のネットカフェ調査では、利用者224人の内で、34歳以下36.1%、35歳以上63.8%であった（厚生労働省2007）。ネットカフェ以外に「路上で寝た」人は43.3%であった。住居喪失の理由は、「仕事を辞めた」52.7%、「借金、友人

- 宅にいる」21.9%、「家族と別居」18.3%であった。就労状態は、「働いている」が 75.5%（その内、派遣 28.1%、アルバイト・パート・契約 57.9%）であった。34 歳以下に日雇直用、35 歳以上に日雇派遣と無業が多い。さらに、2008-09 年の日比谷公園の「年越し派遣村」では、受付相談した 354 人の内で、派遣労働者 37%（その内日雇派遣 16%）、派遣解雇者 21% であった（関根,2009: 44）。同じく生活保護申請者 299 人の内で、30 歳代 22.1%、40 歳代 27.1%、50 歳代 30.1%であった（芦田, 2009: 21）。また元派遣 45.8%、元長期日雇 19.7%であった。保護開始の理由は、「失職した」57.9%、「生活費がない」22.7%であった。
- 14) 稲葉剛は、この人々を「ワーキングプアでハウジングプアな」人々と呼び（稲葉 2010.9.11:1）、厚生労働省は、「住居喪失不安定就労者」と呼んだ（厚生労働省, 2007:5）。
 - 15) 貧困ビジネスには、手帳金融、戸籍売買（生田, 2007: 150-152）、囲い屋、追い出し屋、薬局屋（朝日新聞, 2010.10.1）等がある。その多くは、ホームレスの福祉（雇用保険や生活保護の給付金）に寄生する。
 - 16) Yahoo America に、人々がホームレスになる原因が列挙されている（Wikipedia, 2012.5.30 参照）。精神患者の脱制度化（deinstitutionalization）、都市再開発とジェントリフィケーション、住宅政策の失敗、経済危機とスタグフレーション、退役軍人（とくにベトナム戦争の）救援の失敗、子ども虐待、自然災害、元囚人や薬物・アルコール依存、精神患者の救済の困難、女性・子どもに対する家庭内暴力等である。
 - 17) 2010 年に行われた調査で、結果は連邦議会に報告された。調査の焦点は「ホームレスと政策（シェルター、住宅）」にあるため、ホームレスになる前、シェルターに入る前の仕事・居住に関する情報は少ない。
 - 18) 精神患者の内訳は、薬物中毒者 34.7%、重篤な精神患者 26.2%、DV 被害者 12.3%、HIV/AIDS 患者 3.9%等であった（DHUD, 2010: 18）。
 - 19) 2009 年に、ホームレスを一般居住へ移行させるための Homelessness Prevention and Rapid R-Housing Program が始まり、10 年に 70 万人に住居を提供した（DHUD, 2010: i）。
 - 20) Yahoo America で、インターネットによる物乞い（internet-begging または cyber-begging）の情報と、物乞いへの参加案内が掲載されている。
 - 21) フィリピンとアメリカのホームレスには、概念がカバーする領域の差異という形式的問題に留まらず、公共空間の占有に対する社会的意味の差異という根本問題がある（Aoki, 2012）。
 - 22) 広い定義には、非定住の状態に陥るリスクのある人々まで含めるべきとする意見もある（Levinson, 2004=07: 239）。逆に、街頭で起居する人々に限定して、彼女らをストリート・ホームレスと呼ぶ研究者もいる（Snow & Anderson, 1993:9）。
 - 23) ホームレスは人間であり、そのニード・側面は無限に多様である。この論理でいえば、どの国のホームレスの定義も無限に多様である。
 - 24) 生活に困窮するだれもが容易にホームレスになるリスクをもつ社会的事情の分析は、アメリカのホームレス研究の重要なトピックである。

[文献]

- Alderson, Arthur S. and Jason Beckfield, 2004, "Power and Position in the World City System," In *American Journal of Sociology*, 109(4), pp.811-851.
- Anderson, Nels, 1923, *The Hobo: The Sociology of the Homeless Men* ; Chicago: University of Chicago Press. (『ホーボー—ホームレスの人たちの社会学』上・下 広田康生 訳 ハーベスト社、1999 年)
- Anderson, Nels, 1998, *On Hobos and Homelessness*, edited by Raffaele Rauty, University of Chicago Press.
- Aoki, Hideo, 2000, *Japan's Underclass: Day Laborers and the Homeless*, trans. by Teresa Castelveter, Melbourne: Trans Pacific Press.
- Aoki, Hideo, 2008, "Street homeless as an urban minority: A case of Metro Manila," in *Globalization, minorities and civil society: Perspective from Asian and Western cities*, Kioshi Hasegawa and Yoshihara, Naoki eds., Melbourne: Trans Pacific Press, pp.154-172.
- 青木秀男, 2011「日本のアンダークラス—ホームレス」日本学会議編『学術の動向』 16巻4号 日本学術協力財団 29-34頁.
- Aoki, Hideo, 2012, "Pathway and Spatial Distribution of Street Homeless in Metro Manila: In the Context of Homelessness of Developing Country," (雑誌に投稿中)
- 芦田真吾, 2009「interview 日比谷公園年越し派遣村に対応して」ホームレスと社会編集委員会 編『ホームレスと社会』1 明石書店 16-23 頁.
- 新睦人, 2004『社会学の方法』有斐閣.
- Axtmam, Roland, 2002, "Society, Globalization and the Comparative Method," in *Globalization: Critical Concepts in Sociology, volume 2. The Nation-State and International Relations*, edited by Robertson, Roland and Kathleen E. White, New York: Routledge, pp.328-349.
- Babb, Sarah L., 2002, "The Rebirth of the Liberal Creed: Paths to Neoliberalism in Four Countries," In *American Journal of Sociology*, 108(3), pp.533-579.
- Baum, Scott. 1998. "Global Cities in the Asia Pacific Region: Some Social and Spatial Issues of Integration into the Global Economy." In *Philippine Sociological Review*. 46. Philippine Sociological Society. Manila. pp.1-20.
- Boudon, P. B., Besnard, M. Cherkaoui, B. P., 1993, *Dictionnaire de la sociologie*, Paris: Larousse, 「比較研究法」(『ラールス 社会学事典』訳者代表宮島喬 弘文堂 1997 年) 210-211頁.
- Colico, Ada A., Mark M. Garcia, and Nilan Yu. 2011. "Out of the Center and Into the Streets: How Repeatedly Rescued Clients of Jose Fabella Center, Find Their Way Back to Homelessness", *Social Welfare and Development Journal* 5(1). Manila: Department of Social Welfare and Development. pp. 29-48.

- Department of Housing and Urban Development (DHUD) Office of Community Planning and Development, 2010, *The 2010 Annual Homeless Assessment Report to Congress*.
- Durkheim, Émile, 1895, *Les Règles de la method sociologique*, Paris: Presses Universitaires de France. (『社会学的方法の規準』宮島喬訳 岩波書店 1978年)
- Friedmann, John.1995. "The World City Hypothesis." In *World Cities in a World-system*. Knox, Paul L. & Tasyor, Peter J. ed. Cambridge University Press. (=1997.『世界の大都市』大六野耕作他訳. 鹿島出版会. 191-201頁.)
- Glasser, Irene., 1994, *Homelessness in Global Perspective*, New York: G. K. Hall Reference.
- 濱嶋明・竹内郁郎・石川晃弘編,2005「比較研究法」『社会学小辞典』(新版増補版)有斐閣 512頁.
- Hantrais, Linda, 1995 Summer, "Comparative Research Method," in *Social Research Update*, issue 13, England: Department of Sociology, University of Surrey.
- Hill, Richard Child and Kuniko Fujita, 2003, "The Nested City: Introduction," In *Urban Studies*, 40(2), pp.207-217.
- 平川茂,2009「『ホームレス』とは誰か? - 20 世紀初頭~1920 年代のシカゴにおける」四天王寺大学『四天王寺大学紀要』47 号 33-47 頁.
- Höjdestrand, Tova, 2009, *Needed by Nobody: Homelessness and Humanness in Post-Socialist Russia*, Cornell University Press.
- Hung, Ho-fung and Jaime Kucinkas, 2011, "Globalization and Global Inequality: Assessing the Impact of the Rise of China and India," In *American Journal of Sociology*, 116(5), pp.1478-1513.
- 生田武志, 2007『ルポ最底辺—不安定就労と野宿』ちくま新書.
- 稲葉剛,2010.9.11「生活困窮者支援の現場から」日本都市社会学会 28 回大会報告要旨.
- 岩田正美,1995『戦後社会福祉の展開と大都市最底辺』ミネルヴァ書房.
- Jahiel, Rene I., 1992, *Homelessness: A Prevention-oriented Approach*, Johns Hopkins University Press.
- Kemeny, Jim and Stuart Lowe, 1998, "School of Comparative Housing Research: From Convergence to Divergence," *Housing Studies*, 13(2), pp.161-176.
- 厚生労働省,2007「住居喪失不安定就労者等の実態に関する調査報告書」.
- 厚生労働省,2010「非正規労働者の雇止め等の状況について(平成 22 年 3 月報告)」『平成 22 年版 労働経済の分析—産業社会の変化と雇用・賃金の動向』.
- 厚生労働省, 2012「ホームレスの実態に関する全国調査(生活実態調査)結果について」
- 栗原孝,1991「比較社会変動論ノート (1)」亜細亜大学経済学会『経済学紀要』15巻3号 55-82頁

- 菰淵緑,1994「アメリカ社会におけるホームレスの歴史と現状－社会病理学的分析を通して」大阪府立大学社会問題研究会編『社会問題研究』43 巻 2 号 237-256 頁.
- Levinson, David, 2004, *Encyclopedia of Homelessness*, London: Sage Publication, Inc. (『世界ホームレス百科事典』駒井洋監修 明石書店 2007 年)
- Lo, Fu-chen and Peter J. Marcotullio, 2000, "Globalisation and Urban Transformations in the Asia-Pacific Region: A Review," In *Urban Studies*, 37(1), pp.77-111.
- 正村俊之 2009『グローバリゼーション－現代はいかなる時代なのか』有斐閣.
- 見田宗介,2011「鏡の中の現代社会－旅のノートから」『定本 見田宗介著作集 II 現代社会の比較社会学』岩波書店 1-18頁.
- NHA, National Housing Authority.1993, *Fast Facts on Philippine Housing and Population*. Manila.
- 岡本祥浩,2002a,「日英ホームレス比較研究（前編）」『中京商学論叢』48 巻 2 号 名古屋：中京大学商学会 35-68 頁.
- 岡本祥浩,2002b,「日英ホームレス比較研究（後編）－ホームレス政策の背景」『中京商学論叢』49 巻 1 号 名古屋：中京大学商学会 33-59 頁.
- 尾中文哉,2008a「社会学における『分厚い比較』の意義について」『日本女子大学紀要』18号 1-10頁
- 尾中文哉,2008b「社会学における『分厚い比較』の方法について」『日本女子大学紀要』19号 1-15頁.
- 小野耕二,2001.2. [日本における比較政治学の現状と課題]立命館大学政策科学会『政策科学』8巻3号 67-78頁.
- Padilla, Arnold J.,2000, "The Housing Crisis," IBON Foundation, Inc., *Facts and Findings*, no.53, Manila, pp.1-20.
- Pieterse, Jan Nederveen, 2002, "Globalization as Hybridization," In *Globalization: Critical Concepts in Sociology, volume 1. Analytical Perspectives*, edited by Robertson, Roland and Kathleen E. White, New York: Routledge, pp.265-290.
- Ragin, Charles,1994, *Constructing Social Research: The Unity and Diversity of Method*, Northwestern University, Pine Forge, Thousand Oaks.
- Robertson, Roland, 2003, "Globalisation or Glocalization?" In *Globalisation: Critical Concepts, in Sociology, volume 3. Global Membership and Participation*, edited by Robertson, Roland and Kathleen E. White, New Yprk: Routledge, pp.31-51.
- Roque, Emily B. 2011. "Homeless as a Way of Life: Survival Strategies of the Street Homeless in Manila." *Thesis*. Manila: Ateneo de Manila University.
- Sassen, Saskia, 1988, *The Mobility of Labor and Capital: A Study in International Investment and Labor Flow*. Cambridge University Press (=1992.『労働と資本の国

際移動－世界都市と移民労働者』森田桐郎他訳. 岩波書店.)

Sassen, Saskia, 1991, *The Global City: New York, London, Tokyo*, Princeton: Princeton University Press.

佐藤俊樹,1988「比較研究法」『社会学事典』見田宗介・栗原彬・田中義久編 弘文堂 733-734頁.

Scerri, Catherine. 2009. *Sagip or Huli?: Rescue of Street Children in Caloocan, Manila, Pasay and Quezon City*, Manila: UNICEF Philippines.

関根秀一郎,2009『派遣の逆襲』朝日新聞出版.

Snow, David A. and Leon Anderson, 1993, *Down on Their Luck: A Study of Homelessness Street People*, Los Angeles: University of California Press.

Speak, Suzanne, and Graham Tipple. 2006. "Perceptions, Persecution and Pity: The Limitations of Interventions for Homelessness in Developing Countries." In *International Journal of Urban and Regional Research*, 30(1), pp.172-188.

山本泰,1988「比較文化的方法」『社会学事典』見田宗介・栗原彬・田中義久編 弘文堂 735頁.

UN-HABITAT, 2011, *Innovative Urban Tenure in the Philippines: Challenges, Approaches and Institutionalization*, Manila: United Nations Human Settlements Programme.

Wikipedia, the free encyclopedia, "Homelessness in the United States"
http://en.wikipedia.org/wiki/Homelessness_in_the_United_States